クラシェニンニカフ、スチパーン・ピトローヴィチ

Крашенинников, Степан Петрович.

クリル民族について（『カムチャツカ誌』第二巻、第三部「カムチャツカの諸民族について」第 22 章）

О курильском народе. Описание земли Камчатки. Том второй. Часть третья; О камчатских народах. Глава 22.

ロシア人からはクリル第二島・第三島と呼ばれているパラムシル及びオンニェクタ島居住のクリルについて

О курилах, живущих на Поромусир и Оннекута островах, которые от русских другим и третьим Курильским островом называются.

Л. С. Берг, А. А. Григорьев и И. Н. Степанов (ред.) Описание земли Камчатки. С приложением рапортов, донесений и других неопубликованных материалов. Том второй. сс. 467-472, 738-739. М.,-Л.: Академия наук СССР. Институт географии. Географическое общество Союза ССР. Институт этнографии. 1949.

解題

以下の文章はスチパーン・ピトローヴィチ・クラシェニンニカフ（1711~55）の執筆したロシア科学アカデミーの『カムチャツカ誌』（1855 年初版）の一部と、同じくクラシェニンニカフによる手稿を翻訳したものである。内容が重複するが、相互に対比することで文意がより明確になる関係にある。研究者が北千島アイヌの民族誌として書いたものとしては恐らく最古の文献であろう。翻訳はソビエト科学アカデミーから 1949 年に発行された現代表記・関連資料併載版（第 4 版）を底本とした。幌莚島・温禰古丹島のアイヌに関する手稿はこの第 4 版ではじめて刊行されたものである。原注は同アカデミー民族誌学研究所の B.B.アントローパヴァが加えたもので、原本では脚注の形式であるがここでは番号を振って文末にまとめた。

モスクワに生まれたクラシェニンニカフは 1732 年に科学アカデミーの学生となり、ベーリングの第二次探検に際して設置されたアカデミーのシベリア調査隊の一員として 1737 年から 1741 年までカムチャツカに滞在、動植物学や民族誌を中心とした調査を行ったのちペテルブルグに戻り、彼の直後にカムチャツカで調査を行った G.W.ステラー（1709~46）が残した資料も利用して『カムチャツカ誌』を執筆した（村山 1970 の 70 頁、ステラー（加藤訳）1978 の 160~161、257~261 頁及び加藤 1986 の 84~85 頁）。

さて、ここに訳出した 2 つの記事の関係と意義に注目されたのは故村山七郎博士で、すでに 50 年近く前に両者の全文の和訳が発表されている（村山 1970 の 5~10 頁）。それをここで改めて紹介するのは、村山訳だけを読んだ場合には特に竪穴住居の記載について、下記のように幾分誤解を生む可能性があると考えられるためである。一方『カムチャツカ誌』本文章末の単語集、数詞、自然物名彙は、博士が画像で紹介し解説された内容（同前 20~27 頁）を超えるものはないと思うので省略した。

一つの問題は、村山博士が юрта を一貫して「天幕」と訳している点である。これは普通モンゴル人やツングースのような移動性の強い民族が使う軽量な骨組みの建物を指す単語で、この翻訳は正確である。しかし『カムチャツカ誌』第三部の場合、イテリメン（カムチャダール）の住む土葺き屋根の竪穴住居を指す言葉として（より詳しく言うときは земляная юрта「土小屋」の形で）使われており、北千島アイヌの記述においてもこれと別の意味で使われている形跡はない。またこのことと関係するのが、第二の記事の中ほどに現れるジューパン жупан の問題である。

イテリメンの間には女性の服装をし、女性としてふるまうコエクチュチ коекчуч と呼ばれる男性がおり、特定の男性と一種の愛人関係を結ぶ場合もあった。類似の存在はアメリカ大陸の先住民の間にも広く見られたが、クラシェニンニカフによるとそれが北千島アイヌにもあったという。さてイテリメンの竪穴住居の主要な出入口は屋根にあって炉の煙出しを兼ね、梯子で出入りする。しかしほかに竪穴の側面から地表に通じる通路があって（渡

辺 1981 の 42~43 頁）ジューパン жупан と言い、これは女性かコエクチュチが使うもので、男が出入りすれば笑いものになった（『カムチャツカ誌』第三部第 4 章、ステラー（加藤訳）1978 の 193 頁）。そこを出入りする男という意味でコエクチュチのことをジューパンとも呼んだことが第二の記事からわかるのであり、村山博士があてた「囲い者」という訳から想像されるような立場を指すものではないと考えられる。一般的に言って、こうした性別や社会的役割と出入口との関係は、先史時代の住居の構造を理解するうえで重要な観点の一つであろう。

翻訳に際してオーリガ・アリクシエヴナ・シュービナ（サハリン州立郷土誌博物館）・佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館準備室）両氏の御教示をいただき、またアンドリェイ・ミハーイラヴィチ・サカローフ氏（ロシア科学アカデミー人類学民族誌学博物館）からは底本の書誌情報をはじめ詳細な御教示をいただいたことを記してお礼申し上げたい。（西脇対名夫）

加藤九祚 1986『北東アジア民族学史の研究』恒文社

ステラー（加藤九祚訳）1978『カムチャツカからアメリカへの旅』世界探検全集 4　河出書房新社

村山七郎 1970『北千島アイヌ語―文献学的研究―』吉川弘文館

渡辺　仁 1981「竪穴住居の体系的分類，食物採集民の住居生態学的研究（I）」『北方文化研究』第 14 号　1~108

クリル民族について

クリル民族の生活はカムチャダールとよく似ており、体質も言語も大きな違いがないようなので彼らについて特に記載するまでもないかも知れない。この民族がどこに由来するか [1]、これについてわかっていることは他のカムチャツカの諸民族の場合と同様非常に少なく、彼らの言葉によって多少の研究が可能かもしれないが、それは自らの学芸と職務にかけてこの問題に取り組む人に委ねることになるので、そのためこの章の末尾にクリル語の単語集を追加しておく。

この民族は背丈は中程度、髪は黒く、顔は丸みがあり浅黒いが、他の諸民族よりはずっと風采が良い。彼らの顎髭は大きくて濃く、体は毛深く、この点でカムチャダールとははっきりと異なる。

男性は髪を額から頭頂まで剃り、後ろは伸ばしていて、この点日本人と似ているのは、あるいはかつての交易を通じてこの習慣を採用したのかも知れない。一方女性は単に前髪を切って目が隠れないようにしているだけである。唇は男性では中央だけ、女性ではその全体に入墨し、周囲も刺青模様で飾っている。このほか両手も肘の近くまで入墨しており、この点チュクチやツングースと少し似ている。ほぼ全員が両耳に大きな銀の耳輪をしており、かつて日本人から入手したものである。

海鳥、または狐、さらに海獺その他の海獣の皮をはぎ合わせた上着を着て、その縫い方はツングース風、つまり前が開いた仕立てであり、カムチャツカ風ではない。また上着を単一の素材で作ることにはこだわらず手に入るもので縫うことから、これまで目にしたクリル人のパルカと言えば、様々な鳥獣の皮の切れ端から作ったものがほとんどである。

この土地にしては贅沢な、例えばラシャや緞子などで作った上着に対してもこの偉大な猟人たちは一向にありがたみを感じない。上質の赤い猩々緋（カルマジーン）のコートを着たままアザラシを担いで悪びれることなく、高価な上着がどろどろになるのを気に留めない。衣服の仕立ての如何もあまり気にしない。彼らにはどれも同じで、上着がだぶだぶであろうが極端に窮屈であろうが、ただ色さえ気に入れば構わずそれを着ている。ステラーが書いているように、緞子の女性用綿入れが気に入ったあるクリル人は、それを着た自分の姿を確かめたうえで得々として歩き

回り、女の着物を着ていると言ってコサックたちが笑うのを気に掛けなかった。どうやら彼にはどの上着も同じに見えたようだ。彼ら自身の上着にはそもそも男物と女物の違いがないのである。

カムチャダールと同様の小屋に住んでいるが、ただいくらか清潔にしており、壁や寝台を草で編んだ莫蘆で飾っている。彼らの食物は海獣が最も多く、魚を捕ることは少ない。

神についてあまり知らないのもカムチャダールと同様である。小屋の中には偶像の代わりに縮れた削り掛けを置いており、大変巧妙にこれを作る。この削り掛けのことをイングルまたはインナフと呼び [2]、ある種の敬意をもって取り扱うが、しかし彼らがそれを魔物に捧げているのか、それとも神への務めとしているのか私には探り出すことができない。最初に獲った動物は削り掛けに向かって犠牲として捧げられるのであるが、その際アイヌ自身は肉を平らげ、皮を削り掛けのそばに吊り下げる。そして古くなった小屋を放棄するときにも犠牲の皮や削り掛けを持っていくことはしないかわり、危険な航海の際には常に削り掛けを携えて行き、災厄のあった場合は水中に、特にクリル第一島［占守島］とラパトカ岬の間に現れる海中の大渦の中に投じる。彼らはこれによって魔物ないし神の憐れみを乞うのである。このような偶像崇拝を、クリル第一島とラパトカに住む南部のカムチャダールも航海の安全を祈る方法としてクリルから取り入れた。

夏は舟に乗って行き来し、冬はスキーを履いて歩く。彼らは犬を飼うことも所有することもしないのである。男の主な仕事は海獣の狩猟、女はカムチャダールと同様、縫物と莫蘆（チリェグル）編みに従事するが、夏季は夫たちとともに舟を漕いで狩猟にも出かける。

彼らの習慣について言えば、クリル人は他の諸民族と比較にならないくらい礼儀正しいうえに、心変わりせず、公正、正直で、柔和である。静かに話し、定住コリャークのように互いの話が終わるのを待たずに口を出すようなことはない。老人には大層敬意を払う。互いに大変仲良く暮らしており、自分の親族には特に暖かく接する。別の島に分かれて住む住民が再会したときの様子はなかなかの見物だということである。自分たちの舟から降りた来訪者と、小屋から出てきた住民たちとは重々しい儀礼を交わしつつ近づく。両者とも戦いのいでたちで武器を持ち、刀や槍を振りかざし、互いをめがけて弓を引き絞って、まるで本当の戦闘のようであり、さらには皆で舞踏をなす。互いに顔を合わせたところで喜びを体中で表現する。抱き合い、口づけし、嬉しさのあまり泣き出す。そのあと客人を自分たちの住居へ連れて来て座らせ、食べ物を勧め、客のそばで別離の間に客人たちの間に起きた出来事の消息を聞く。こうした物語は男の老人の役目と決まっている。彼は語り手としてあらゆる細々したこと、暮らし向きがどうだった、どこへ出かけた、何を見た、誰それに幸不幸があった、どんな理由で誰が病んだ亡くなった、といったことを説いて聞かせる。そうしてしばしば 3 時間以上も話し続ける間、残りの人間はそれをかしこまって聞いている。客人が語り終えたらその土地に住む老人のうちから同様に自分たちの生活や稼ぎについての話があって、それが済むまでは誰も互いに話すことができない。そのあとそれらの消息に応じてあるいは嘆きあるいは喜び、そしてようやく彼らなりの祝賀にかかり、食べ、踊り、歌い、そして物語を聞かせる。

そのほかの儀礼、例えば求婚や結婚、出産、子育てなどについては、彼らはカムチャダールと変わらない。妻を二人も三人も娶るが一緒に寝起きすることは決してなく、マホメットの掟に従うタタールよろしく、夜中に泥棒のように妻のところにやって来る。タタールは約束どおりの結納金（カルイム）を払い終えないうちは自分の新婦のところに忍んで来るのである。また彼らの間にもコリャークやカムチャダールの場合と同じくコエクチュチ［解題参照］がいる。

彼らのうちに姦通をはたらくものがあったとき、杖で互いを殴り合う奇妙な決闘が行われるが、これは姦通した男が相手の夫に申し込む。双方素裸になり、互いの背中を撃つ。申し込んだ男がまず 3 度、挑戦を受けた男からの打撃に耐えなくてはならない。それから杖を手に取り、同じように打ち返し、これを 3 回まで応酬する。この果し合いは両人の寿命をあらかた奪う。というのも二人は力の限り殴りあうが、杖はしばしば腕の太さであり、長さは 1 アルシン［約 71cm］に近いからである。決闘を拒むことが大いに不名誉であるのは西欧のいくつかの民

族の場合と同様である。もし自分の命を惜しみ果し合いを避けるなら、女性の夫に不義を償うため、獣なり上着なり、あるいは食べ物やそのほか彼の求めるものを支払わなければならない。

クリル女性のお産はカムチャツカ人の場合よりずっと重い。クリル人自身の説明によると回復に三か月かかるという。子供の名前はお産を助けた女性がつけ、その名前を変えることは決してない。双子が生まれると必ずその一人を殺す。

男の名前。リパガ、イェチェハン、タタル（色黒）、ピカンクル、ガルガル、チェンプチ。

女の名前。アファカ、ザーグシェム、チェカワ、カズクチ（自分の国が征服されたときに出産して泣いている女）。

死者が出ると冬は雪の中に、夏は地中に埋葬する。自殺はこの民族においてもカムチャダールと同じ程度に見られるが、ただ食べ物に困って自殺したということは聞かない[3)]。

第一島［占守島］とラパトカ岬に住んでいるクリル人を以上のクリル人と同一の民族と考える必要はない。既に述べたように彼らは実際のところカムチャダールなのである。

クリル語単語集（略）

数の数え方（略）

獣、鳥及び魚その他彼らが知っている自然物の名称（略）

原注

1) アイヌはその人類学的、言語学的及び民族誌学的特徴から見てあらゆるシベリアの民族集団に対して異質な存在であり、そのため長い間学者たちにとって謎であり続けた。彼らの由来の問題を解くべく大胆な試論を示したのはЛ.Я.シュテルンベルグである。彼の意見によるとアイヌの故郷はオーストロネシアである。この結論は、当時知られていたあらゆる人類学的、言語学的及び民族誌学的データの複合的な研究を基礎にして彼が導いたものである。

Л.Я.シュテルンベルグは文化のあらゆる分野についてアイヌとオーストロネシア諸民族の親縁関係を探求した。こうした類縁を示す物質文化の要素で他の隣接諸民族集団には知られていないものとして彼が挙げたのは、織機、樹木の靭皮製の夏服、同じく靭皮ないし木材で容器を綴る技術、単弓、戦闘用の棍棒、波除け板のついた航海用ボートなどであった。宗教的信仰の分野で親縁関係が探求されたのはイナウの崇拝、熊祭、蛇の崇拝などである。アイヌとオーストロネシア諸民族の言語についてЛ.Я.シュテルンベルグは多くの共通した特徴を見出した。体質的な類型についても、この研究者の意見では、髭の多いアイヌはオーストラロイド人種の一種であり、この人種は変異を示しながらオーストラリア、南インドおよび西太平洋に広がっている。

Л.Я.シュテルンベルグの仮説は深刻な反論を受けることもなく、孤立した諸民族集団の成立の問題を解決する試みのうちで最も成功したものの一つとみなされている（Л.Я.シュテルンベルグ「アイヌ問題」『人類学民族誌学博物館論集』1929年、8巻334~374頁）。

2) イナウの崇拝について詳しくはЛ.Я.シュテルンベルグ「アイヌ族のイナウ崇拝」『ロシア人類学協会年報』1904年第1巻、289~308頁を参照。この論文は次の図書にも収録。Л.Я.シュテルンベルグ『原初の宗教』レニングラード、50~61頁。

3) 1875年クリル諸島はロシア政府によりサハリン東南部と引き換えに日本に引き渡された。1884年、日本政府は北クリル諸島のアイヌの全員97名を南部の色丹島に移住させた。この新しい条件下、日本からの援助も受けられなかった移住者たちは惨めな生活を送り、人口は急速に減少した。1913年には僅か57人が数えられるに過ぎなかった（Д.パズニェフ『北部日本の歴史、及びそのアジア大陸とロシアとの関係に関する資料』第1巻、横浜、1909年、110~120及び125~126ページ）。

ロシア人からはクリル第二島・第三島と呼ばれているパラムシル及びオンニェクタ島居住のクリルについて

クリル人はカムチャダールとは異なる言葉を話し、多くは中背で、髪は黒く、丸顔で浅黒いが、しかしカムチャツカの住民よりはずっと風采がよく、顎鬚が豊かで全身に毛が生え、頭の前半、両耳の間を剃って、後は長い蓬髪で編み込まず、両耳に耳輪をし、海鳥や狐の皮で作った短めの上着を着て、ズボンと毛皮の靴はカムチャダールのものと同様である。

女も男と同じ上着を着、髪を編まないが、男のように剃ることはせず、目に入らない程度に前髪を切りつめている。上下の唇にすべて入墨してその周りも、さらに両手も肘まで刺青で飾るが、男の入墨は上下の唇だけで、しかもその中央を黒くするのみである。

男は夏は海獣の狩猟に従事し、女も漕ぎ手として舟に乗って同行する。冬は男は狐狩りをし、女は莫蓙（チリェル）を編み服を縫う。

あらゆる海の獣、詳しく言えば海獺、オットセイ、トド、海豹、鯨が食料になり、陸の獣は狐、熊などを獲物とし、また海から打ち上げられる魚、海老、昆布をあさる。簡単に言えば海からもたらされて彼らの食物にならないものなどなく、冬に備えて魚を蓄えることはあまりしない。

カムチャダールのものと同じような小屋に住んでいるが、その中に木の削り掛けがあり、これをインナフと言う。この削り掛けが魔物の崇拝をするものか神をあがめるものか尋ねたが、話したがらないのか本当に知らぬのかは知らず、問い糾すことはできなかった。ただ聞くところでは、最初に獲った海獺、オットセイあるいは海豹はこの削り掛けに向かって犠牲として捧げ、肉を食べ、皮はインナフのところに掛ける、また小屋が古くなったときには同じところに新しい小屋を建てず、新しい場所に引っ越す風習を持っているので、このとき古いインナフは犠牲の皮とともに古い小屋に置き去りにされ、そのかわりに新しい削り掛けをつくり、このインナフを海を越えて持っていくのであるという。また嵐が起こったときは、削り掛けを犠牲として風が弱まるよう海に投げいれるが、投げ込むときに「トゥ、トゥ、トゥ」つまり「取れ」と叫ぶ。

妻を二人、また三人も娶り、そのうえジューパン［解題参照］を抱える。

結婚もカムチャダールの場合と同様で、妻問式である。夫は妻と別々に寝ており、夜中になって誰にも気付かれないようひそかに妻のところを訪れる。

もしよそ者が夫のある女性と不貞を働いて、そのことを夫が知った場合、彼は間男を呼び出し杖で打とうとするが、間男はこれを拒むことは許されない。なぜなら彼らの間ではこの決闘を断ることは恥であり、仮に男が面目を損ねても命を重んじた場合、彼はこの不名誉の償いとして挑戦者に対し、彼が求める限りの支払いをしなくてはならないからである。

彼らが打ち合いに使う杖はストゥンと言い、長さ 1 アルシンと 4 分の 3［約 125cm］、末端の太さは人の腕ほどあり、一方手で持つ部分は少し細い。この杖の一番細い部分に刻み目がついており、そこから末端に向って長さ方向に、上記の刻みの上から溝が切ってある。そしてこの杖にはもう 2 箇所刻みがあり、一つは下端、つまり上記の刻みの少し下にある。上方の刻みの上に細い紐が結び付けてあり、上述の溝に沿って次の刻みの箇所まで続き、刻みに巻きつけた形になってまた溝に沿って下へ続き、杖の下方ほぼ４分の１は皮の覆いが付き、杖の端に紐を締めるための木片が結んである。下端の刻み目には別の紐が巻きつけられ、溝に沿って伸びている紐が溝から外れないようにしてある。

決闘の時はそれぞれが杖を持つのではなく、杖は二人に一本あるだけで、裸になって背中を打つのであるが、はじめに一人が右手で杖の中ほどと下端の刻みの間を握り、左手は紐の上から締め木のところを握り、そして三度、持てる力の限り相手を殴り終えたら、相手に杖を渡し、相手は同じ回数殴り返して、それを三回応酬してから立ち分かれる。はじめに打ったほうの男が有利で、というのも打たれたほうはさほど強くやり返すことはでき

ないからである。決闘のあと両人は4週間ほど寝込むが、時には死んでしまうこともある。

クリル女性のお産は重く、そのあと一月は通常の仕事はしない。子供の名前はお産を手伝った女がつける。

もしある女が双子を産んだときは、あとから生まれたほうの子供が殺される。

死者は夏には土に埋葬するが、冬には雪に埋める。彼らの間には自ら望んで死ぬ風習がある。カムチャダールの風習の記載に見られる自殺のことが想起される。

第一島とラパトカ岬に住むクリルはカムチャツカの言葉を話し、また何事もカムチャダールに類した風習を持っているが、ただ違うのは、小屋にアジュシャク[注] ではなく削り掛けを置いていることで、この点で上記のクリルと似ており、また互いに杖で打つ習慣があること、妻のところへ忍んでいくこと、また大方海獣を食物にしていることも同じである。

（科学アカデミー文書館、文庫21、目録5、60番、第30葉裏面から32葉）

注）原文 ажушак。イテリメンの竪穴住居内に置かれる、人頭のついた棒状の木製偶像で『カムチャツカ誌』第三部第4章に記載がある（ステラー（加藤訳）1978の192~193頁）。なお加藤訳では「アジュタク」となっているが、ш と т は字体によっては似ているので加藤博士が底本とした1948年の現代ロシア語版に転写の誤りがあったものであろうか。後年の出版では「アジュシャク」に改まっている（加藤1986の98頁）。